愛媛・南江戸（みなみえどくじゅめ）闘目遺跡

1　所在地　愛媛県松山市南江戸

2　調査期間　第二次調査　二〇〇一年（平13）六月～二〇〇二年四月

3　発掘機関　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

4　調査担当者　中野良一・北山育美

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　中世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

南江戸闘目遺跡は、松山平野南部を流れる石手川によって形成された氾濫原に位置する遺跡で、大峰ヶ台丘陵の南裾部を流れる宮前川の南岸にあたる。調査は宮前川の河川改修に伴うものである。

南江戸地区では過去二〇数カ所の調査が行なわれ、古代末から中世の遺構が多数検出され、広範に点在する集落（村落）の様相が明らかになりつつある。

今回の調査では、東西二カ所の居住域（東は推定七〇m四方、西は推定三五m四方）が確認された。木簡は、東の居住域北限と宮前川との間の砂地から出土した。この他、墨痕は認められないが、薄い板材の上端を台形状に成形し、下方にむかって徐々に幅を狭め、下端は尖らせる形態の木製品が一点出土している。この場所では漆椀や箸、加工木材片なども出土しており、これらはこの場所に廃棄されたものと考えられる。この他、土師器の杯・皿・椀、瓦器椀、常滑焼の甕など遺物の種類も多く、土器溜りも存在しており、出土量は膨大である。特に中国陶磁器類は約千点も出土しており、鎌倉期の遺跡としては県下で最も多い。なお、木簡の時期は、居住域で認められる土器溜りの土師器杯からみて、一四世紀前後と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□□□　(57)×28×3　019

上端部のみ残存している木簡で、薄い板材を使用しており、上端は丸みをもつ台形状に成形している。側面は削り調整と思われる。表面は僅かに墨痕が認められるが、釈読できない。

（中野良一）